

佐賀市議会 自民さが
会派長 江頭 弘美 様

江原 新子

視 察 報 告 書

○視察先:遠野市「子どもの森遠野」(図書館)

○視察日:令和6年10月1日(火)

1. 視察の目的

近年、子どもの読書離れや地域コミュニティの希薄化が指摘されている中で、公共図書館の果たす役割が再評価されている。本市が市民図書館の改修を計画していることから、ハード面及び運営面でも参考にしたい図書館の視察を行った。

「子どもの森遠野(図書館)」は、子どもを中心とした読書活動の推進と、自然と調和した環境の中での学び・育ちを支援する先進的な取り組みとして注目されている。

2. 「子どもの森図書館」概要

- 所在地:岩手県遠野市松崎町白岩14地割
- 開館:令和4年4月
- 設置・運営:遠野市教育委員会
- 施設特徴:
 - 木造建築を基調とした温かみのあるデザイン
 - 周囲の森林と一体化した自然共生型の環境
 - 図書の選定に「子どもの自由な発想と感性を育む」ことを重視
 - 読書スペースに加え、遊び・探究・工作・対話などができる複合空間
- 対象年齢:主に幼児～小学生とその保護者

3. 主な所見

(1) 環境と建築の融合

図書館自体が「森の中の家」のような佇まいであり、来館者が自然と調和した空間で過ごすことができる。木材の多用や大きな窓による採光など、心地よさを重視した設計が、子どもたちの安心感や好奇心を引き出している。

(2) 利用者参加型の運営

市民・親子・ボランティアが積極的に運営やイベントに関与しており、「利用者が図書館を育てる」姿勢が徹底されている。特に、地元の語り部による昔話会や、地元産木材を使ったワークショップなど、地域資源の活用が印象的だった。

(3) 教育との連携

学校や保育園との連携が強く、図書館が地域の学びのハブとして機能している。学校単位での利用や出前お話し会など、教育機関との有機的なつながりが実現されていた。

4. 課題・留意点

- 冬季の寒冷気候に対する館内の保温対策や利用促進策が必要（特に通年運営を想定する場合）
- 遠隔地からのアクセス性に課題があり、市外からの誘客には交通手段の工夫が求められる
- 地域ボランティアに支えられる運営であるため、人材の確保と持続的支援体制の構築が鍵

5. 所感

- 自然と調和した施設デザインは、単なる図書館機能にとどまらず、「居場所」や「体験の場」としての価値を高める。今後の図書館改修や新設の際の参考としたい。
- 子ども向けに特化した施設運営（選書・空間・運営企画）を進めるにあたり、保護者や地域人材の参加促進が重要である。
- 図書館を「地域と教育をつなぐ拠点」として再定義することで、読書活動の推進にとどまらず、コミュニティ全体の活性化に寄与する可能性がある。

6. まとめ

「子どもの森遠野(図書館)」は、単なる図書貸出機能にとどまらず、子どもたちの創造性・感性・地域とのつながりを育む空間として高く評価できる。今後の図書館の在り方を考える上で、多くの示唆を得ることができた。

○視察先:岩手県釜石市

○視察日:令和6年10月2日(水)

○視察項目:「釜石オープンフィールドミュージアム構想をもとにした持続可能な観光地づくり」

1. 視察の目的

釜石市が推進している「釜石オープンフィールドミュージアム構想」は、地域全体を一つの“屋外博物館”と見立て、自然・歴史・文化・暮らしを体験できる観光地づくりを通じて、持続可能な地域振興と観光経済の活性化を目指すものである。

本市においても観光資源の磨き上げや、地域住民と一体となった観光まちづくりが重要な課題であることから、同構想の具体的な取組や課題、効果等を把握し、今後の政策検討の参考とするため視察を行った。

2. 視察内容の概要

(1) 釜石オープンフィールドミュージアム構想の概要

- 市全体を「学びと癒しのフィールド」として位置づけ、震災遺構、製鉄の歴史、自然景観、地域文化など多様な資源を統合的に活用。
- 「点」ではなく「面」で観光地を捉え、地域住民の協力を得ながら持続的な観光モデルを構築。
- ハード整備に頼らず、「語り部」や「体験プログラム」など、人的資源を活用したツーリズムを重視。

(2) 実施主体と運営体制

- 官民連携による推進体制(釜石市、DMO(観光地域づくり法人)、地域団体等の協働)。
- DMOが中心となって観光資源の掘り起こし、プログラム開発、広報・販売までを担う。

(3) 取組の事例

- 「鉄と魚とラグビーのまち」という地域アイデンティティに根ざしたプログラム開発。
- 震災遺構や防災教育ツアー、漁業体験、里山ガイドなど、多様な体験型観光の提供。
- 地域住民の参画による「語り部」育成や、持続的な雇用創出にもつながっている。

3. 所感

(1) 地域資源の再定義と物語化の重要性

釜石市のように、既存の観光地ではない場所でも、歴史・文化・自然・産業の要素を丁寧に「物語」として紡ぎ、地域の「語り部」と連携することで観光コンテンツとして昇華させている点は非常に参考となる。

(2) 市民参画と人材育成の仕組み

観光の担い手として地域住民が主体的に関わっている点も注目される。特に、世代を超えた語り部やガイド人材の育成は、本市でも検討すべきテーマである。

(3) 佐賀市への応用可能性

佐賀市には、吉野ヶ里遺跡、佐賀城、幕末維新の歴史、豊かな自然や食文化など、多様な資源がある。これらを面で捉え、「地域全体がミュージアム」という視点で再構築し、市民と観光客がともに学び・楽しむ場を創出することが、持続可能な観光地づくりに資するのではないかと。

4. まとめ

釜石市の取組は、観光地化による一時的な賑わいにとどまらず、地域の誇りや学びの場を創出しながら、観光による持続可能な地域経済の循環を目指す点で極めて示唆に富んでいた。

佐賀市においても、住民主体の観光資源開発と、地域全体を「学びの場」とする視点を取り入れた政策展開が求められる。

視察報告書

令和6年10月1日

令和6年10月2日

自民さが

宮崎 健

1. 遠野市「こども本の森遠野について」

館内に一步足を踏み入れた途端に、感嘆の声が上がった。まさしく子どものための図書館であり、それが民話のメッカである遠野にそれも古民家の再生という名の下に実現をしているからだ。書架の飾り方一つにとってもこだわりがありコンセプトに忠実に沿っている。子どものためでもあるが大人も十分楽しめるものだ。

また、このプロジェクト中心市街地の対策の一環だとも説明を聞いた。なるほど、図書スペースのみならず様々な人が寄れるコミュニティの要素も大きい。

特に考えさせられたのが、一つは専門のブックディレクターがいて、この方のプロデュースの役割が非常に大きいことだ。逆に言えば、今有料でプロデュースしてもらっているのだが、これが途切れた時どういったリスクがあるのだろうかと思ったことだ。

もうひとつは市民のサポート体制である。「こどもの本の森遠野を育てる会」は自由に意見を集いながら協力体制を作り上げている。これは市民にこだわらず、誰もが参加することができるものだ。

今、佐賀市が市立図書館の再整備事業が行われている。今回の視察で、市民がしっかりと運営に携わることができるような図書館であって欲しい。そのためには育てる会のような組織の立ち上げも行ってしかりだと感じた。

2. 釜石市「釜石オープンフィールドミュージアム構想について」

まち全体を博物館に捉えた釜石オープンフィールドミュージアム構想は、そもそもの着眼点の発想は滞在型ツーリズムの一つからだとのことだった。

3.11の大震災で甚大な被害が起きた釜石市にとって震災復興における一つのツールとして観光を通じた復興の実現であった。そこで取り組みを行ったのがこれまでに無いDMCの設立である。

既存の観光協会は自治体と会員でマーケティングやプロモーションをするいわゆる事業者目線であるのに対しDMOは地域をマーケティングやプロモーション、そしてマネジメントまで行ういわゆる客目線に立ったものだ。

釜石はそこに地域商社の性格を有し、実際に来てくれる人に手配や体験を提供する「株式会社かまいしDMC」なるものを作った。

実際は市の事業の委託料とふるさと納税が財源となっているということだが、今の観光のトレンドはまさしく「体験」である。またそこに釜石市のようにSDGS持続可能な観光の推進を謳い文化と自然の融合を図った観光ビジョンを体験に織り込むことで震災復興へとつながっていく。

本市においても観光協会の性質から脱却したお客様目線の観光資源の発掘、パッケージ化を進めるべきと思った。

10 / 1 「こども本の森 遠野」

こども本の森構想推進事業は「遠野物語」を生んだ永遠の日本のふるさと遠野。沿岸部のハブとなり震災復興の拠点となったこの地で、脈々と伝承されてきた古き良き文化を土台として、未来をつくる子どもたちのために、本を中心とした新たな復興のシンボルをつくることとしている。

この事業には世界的建築家の安藤忠雄氏が東北復興のシンボルは子どもたちの未来である。子どもたちの未来のためには、本・読書が大事ではないかとの強い思いが事業の展開に繋がっている。資金は東日本大震災時に「桃・柿育英会」を立ち上げ、育英資金の寄付を募り、岩手県へは17億円が寄付された。また、これとは別に安藤忠雄氏は「こども本の森 遠野」へ寄付をしている

施設の運営は、遠野市職員が常時2名配属されているが、業務委託として（一財）遠野市教育文化振興財団（職員2～3名、保育士）が管理している。施設内では子育て支援拠点事業も実施している。

利用状況は、年間の入館者数が2万人で地域割合として、市内33%、県内45%、県外22%であります。令和3年7月に「こども本の森 遠野」を育てる会が発足され、施設運営や子どもたちを支援している。

ここからどのように子どもたちが羽ばたいていくのか非常に興味が湧きますし、子どもたちの意見を聞きたくなりました。

佐賀市において新たな施設は無理としても、子どもの居場所として佐賀市図書館や分館、公民館の図書室など充実を図る必要がある。

10 / 2 釜石市観光振興ビジョン「釜石オープンフィールドミュージアム構想」

釜石市を屋根のない博物館と見立て、三つの柱をもとに事業展開を行なっている。

1. 目指す姿として観光を通じた震災復興の実現。内容として観光を通して住む誇りを取り戻し、移住者の増加を目指す。またこれらの支援のために滞在交流型観光システムを創りあげる。

2. KPIとして市民意識指標と経済指標を掲げ、市民意識では誇りを持つ市民の割合と人を呼び込もうとする割合、経済として宿泊者数とプログラム参加者数などを数値として割り出している。

3. 持続可能な観光への取り組みとして、持続可能な観光の国際基準を記載し、国内初の国際認証の取得を目指している。

以上を取り組むために、観光地域づくり法人「株式会社かまいしDMC」を平成30年4月に設立し、地域の魅力を引き出す旅行マーケティング事業、地域の稼ぐ力を引き出す地域商社事業、地域の活力を引き出す地域創生事業の三本柱で事業を展開している。

コロナ禍で苦戦はしていたものの、2023年では入込客数、宿泊者数とも前年より2,500~3,000人増加している。また経済波及効果も21億円となっている。今後とも事業展開を重ね効果を伸ばしていく方針であります。釜石市の持続可能な地域づくりは震災が原点であり、SDGsが掲げる「誰ひとり取り残さない」というメッセージは釜石市の復興が目指す街づくりのテーマとも共通する。市民も世界各国のどこの国の方がいても、安心して暮らせる街にを心に秘めておられると思う。

佐賀市においては、現在展開している観光事業の充実と来客者の要望を聞きつつ、魅力ある事業を目指してほしい。また、多くの市民を取り込んだ体制づくりも欠かせないものとなると考えます。リピーターが増えていくのを期待します。

今、プロスポーツによる機運が高まりつつありますし、スポーツで観光の振興を図ることが可能となってきています。これから期待するところです。また、来年新たな駐屯地が開設され、オスプレイが配備されます。これもまた人を呼ぶよび水となるのではと思います。

視察報告書

自民さが 稲葉嵩広

日 時：10月1日

視察先：岩手県遠野市

令和3年7月にオープンした「こども本の森」は、安藤忠雄が日本の未来を担う子どもたちに本に触れてほしいというコンセプトのもと、全国の自治体に寄贈し展開されているプロジェクトである。このプロジェクトは、スマートフォンが普及する時代においても、本を読む行為の価値を再認識し、遠野市の民話の里という立地が非常に適していることから始まった。本の80%は全国からの寄付によって賄われており、海外の本も含まれており、これらは各国の大使館からの寄贈によるもので、図書館の運営は市民との共同作業によるものであることが特徴である。市民とのワークショップや情報交換会を通じて、多様な声を取り入れ、進化してきた点も注目に値する。

「こども本の森」では、ブックディレクターがコンセプトに基づいた選書を行っている。特に配書方法では、関連性のある書籍を近くに配置するなどの工夫が施されており、子どもの興味を更に広げることに注力していた。また、図書館とは異なり、本の貸出しは行わず、安藤忠雄の「何度も来館してほしい」という思いを具現化している。

運営に関しては、遠野市の職員が2名おり、施設の運営やイベントは遠野市教育文化振興財団に委託されている。また、子育て支援事業にも取り組んでおり、未就学児向けの企画も実施し、国と県からの交付金を得て、図書館の運営を行なっている。来館者の30%は市民であるが、多くは市外や県外からの訪問者のようである。市民ワーキングでは、子どもたちがリラックスして本に親しむことができる環境づくりが提案され、子ども目線が大切にされている印象を受けた。また、財団への委託費は約1300万で、資金の多くはふるさと納税に依存していた。

この新しい施設の開館が周辺地域に及ぼす影響については、PRが不十分なため商業の活性化には至っていない状況のようであり、その点は課題であると考えます。

日 時：10月2日

視察先：岩手県釜石市

釜石市は人口約3万人で高齢化率が40%に達しており、地域の現状は厳しい状況である。2011年の東日本大震災で大きな被害を受けたものの、今では復興を遂げ、地域活性化を進めており、その一環として「オープンフィールドミュージアム構想」を策定し、市全体を屋根のない博物館として位置づけることで市民の誇りを育み、観光客を増加させるこ

とを目指している。この構想の中で特筆する点は、グローバルサステイナブルツーリズムの国際認証取得である。また、観光協会を「株式会社かまいしDMC」に置き換え、観光戦略の刷新を図っている。DMCは、地域商社事業や地域創生事業に取り組み、持続可能な観光のビジョンを掲げ、震災に基づく防災プログラムやワーケーションを導入し、観光庁からも高く評価されている。平成29年に策定したこのオープンフィールドミュージアム構想により、観光客の数は震災前の60%程度まで回復しているが、完全には元の水準には戻っていないため、引き続き課題は残っているようである。

また、DMCはワーケーションだけでなくスポーツ合宿にも力を入れており、地域のスケールを考慮した戦略が印象的であった。

自民さが視察研修報告

自民さが 川崎健二

1 日時・場所

令和6年10月1日 9:30～11:30 岩手県遠野市こども本の森
2日 9:30～11:30 岩手県釜石市市議会

2 所感

(1) 遠野市こども本の森

- ① 壁一面、天井付近まで本が横向きに陳列されているが、頭の高さ以上は震度7までの耐震強度で固定してあり取り出すことはできない。その代わりに同じ本が下の本棚に縦向きで置いてあった。
蔵書冊数14000冊は標準的な学校図書館と同程度であるが、表紙を向けてあるので広いスペースが必要である。
- ② 配架の分類が全国の図書館で標準採用されている「十進分類表」ではなく、幅允孝が考案した14の大テーマ(0あの人の本棚、1東野と東北、2自然と遊ぶ…)で並べられていた。安藤忠雄の全国で二番目の子ども図書館と同時にこの配架を見に来る人も多いとのことであった。
- ③ 本館には図書館司書はおらず、保育士2名を含む5名のスタッフで運営されていた。図書館利用と同時に子育て支援の拠点としても活用されている。子供が本を読んでいる間にお母さんがこっそり育児相談をする、というように使われていた。
- ④ 建物は空家だった呉服屋をリノベーションしたものである。街の中心にあるため、この空家をどのように活用するのか、7・8年調査や研究、検討をしてこども図書館とすることになった。
- ⑤ 安藤忠雄氏とは赤坂憲雄氏(遠野文化研究センター所長)が国の復興構想会議で相談したのが始まりであった。中央とのパイプ、キーマンの必要性を感じた。
- ⑥ こどもの図書館であるが7割は大人で、しかも市外からの利用者が7割近いことに驚きを感じた。まさに「大人も子どもに戻れる空間」であった。

(2) 釜石市議会

【前置き】視察前に釜石市の人口の推移を調査したところ、佐賀市と比較し釜石市は減少の一途をたどっており、消滅可能性自治体になっている。当初、その原因として鉄鋼産業の斜陽化・東日本大震災の影響を考えていた。しかしながら新日本製鉄釜石製鉄所の粗鋼生産量は2022年こそ4440万トンであるが、1972年に1億トンを達成してから2007年の1億2200万トンをピークに2018年まで1億トンをキープしている。地理的要因の他に何が関係しているのか、興味をもって視察に臨んだ。

釜石市(に相当する地域)の人口の推移

1970年(昭和45年)	72,923人
1975年(昭和50年)	68,981人
1980年(昭和55年)	65,250人
1985年(昭和60年)	60,007人
1990年(平成2年)	52,484人
1995年(平成7年)	49,447人
2000年(平成12年)	46,521人
2005年(平成17年)	42,987人
2010年(平成22年)	39,574人
2015年(平成27年)	36,802人
2020年(令和2年)	32,078人

佐賀市(に相当する地域)の人口の推移

1970年(昭和45年)	215,000人
1975年(昭和50年)	222,687人
1980年(昭和55年)	236,029人
1985年(昭和60年)	242,072人
1990年(平成2年)	243,726人
1995年(平成7年)	246,674人
2000年(平成12年)	243,076人
2005年(平成17年)	241,361人
2010年(平成22年)	237,506人
2015年(平成27年)	236,372人
2020年(令和2年)	233,301人

- ① 株式会社かまいしDMC (Destination Management Organization) は地域外からの観光客や繋がり人口の増加と、地域商社として釜石の特産品を域外で販売していくのが目的で、設立時は市長が代表取締役であった。
- ② 本プロジェクトは代表取締役の河東英宜氏の力によるところが大きい。主導的に推進する優秀な人材の確保があつてこそ可能であると思つた。
- ③ サステイナブルツーリズム (観光SDGs) の国際的な認証機関は200ぐらいあり、オランダのグリーン・ディステイネーションズはその中でも権威ある機関で日本に駐在員がいる。
- ④ 認証は観光地管理や自然、文化伝統など6テーマ100項目の達成率が60%以上でブロンズ、70%~シルバー、80%~ゴールド、100%で承認。
- ⑤ 「市民一人ひとりが市民としての誇りを持つ割合を高める」ことが課題であると説明されたが、市民意識に関するKPI (2年に一度、アンケート調査) の数値は令和2年が32%に対し、令和4年は14.7%に低下していたとのこと。原因や対策を研究中であるとのことであつた。
- ⑥ 体験や学習ではなく、若者がここに定住したいと思うためには安全性が必須と考える。地震・津波の恐怖は相当のビハインドであろう。株式会社かまいしDMCの取組「住まう誇りの情勢」「稼ぐ力を引き出す」は切実な思いである。
- ⑦ 市庁舎の老朽化が人口減少・産業衰退を表していた。新庁舎の建設予定はあるが、まずは市民生活を優先する方針で、市職員の再興にかける思いや必死さを感じた視察であつた。

会派視察 報告書

③民友が

代表 江頭弘美様

報告者 西岡 義広

日時 R6 9/30(月) ~ 10/2(水)まで

視察先 遠野市 (子ども本の森 遠野について)

釜石市 (釜石オープン・フィールド・ミュージアム

(観光 SDGs) について)

④10/1(火) 遠野市 (子ども本の森 遠野について)

(所感)

在界の建築家・安藤忠雄氏は「東北の復興のシンボルは子どもたちの未来である」「子どもたちの未来のためには読書が大事ではないか」と提唱

R元 7月 安藤忠雄建築研究所を本長が越前訪問

R元 7月 安藤忠雄氏から遠野市に「子ども向け本の施設」を寄贈したいとの申出があったとある。

よて R元 10/20 子ども本の森 遠野オープン

大勢おどろいたのは 迷路の環境 探検気分

子どもが走っても馬鹿いでも「叱らば見守る」として自然に本に親しむ事が出来た。

左で感じたのは 駐車場が私に思っただけだった。

確かに人口28,400人の規模ではあり

本市の図書館に取っては残念な所から

参考にはならないかと思う。

後「法人・個人の場合」寄附金集めは参考には

な、た 次策であった。

① 10/2 (水) 釜石市 (釜石オーポラ・フィールド・ミュージアム
観光SDGs) について

〈所感〉

釜石市と言えど 1123年 3月11日 9mを超える津波が襲来。死者・行方不明者 1040人。初避難者 9883人。約3割の住宅が被災。約6割の事業所が被災。約9割の漁船が被災。家庭ごみ50年分のかき。津波堆積物(約100万ト)当時のTVの画面を思い出した。あった。

2018年に日本で初めて「世界の持続可能な観光地100選」に選出され 釜石市全体を「屋根のない博物館」と見立てる「釜石オーポラ・フィールド・ミュージアム構想」を推進する官民連携の組織として設立。

釜石市の持続可能な地域づくりは震災が原点でありSDGsが掲げる「誰一人取り残さない」というメッセージは釜石市の復興が目指す街づくりのテーマとも共通する。

市民も世界各国のどこの国の方からいても

安心して暮らせる街に。とある事であった。私としてはやっぱり 身も心も来たものがあった。次男である。漁料関係は経済にも渡したと思う。

以上 報告と致します

会派行政視察所見

令和6年10月2日（水）9時30分～

岩手県釜石市

視察事項：釜石オープン・フィールド・ミュージアム（観光SDGs）について

江頭弘美

この構想の最たるものは、まち全域が「屋根のない博物館」としてプロデュースされているところにある。「住民が生き生きと暮らせるまちこそ、真に楽しめる観光地である」という理念のもと、(マネジメント) (社会経済) (文化) (環境) の4つの指標に沿った「持続可能な観光地」の実現を目指している。

持続可能な観光地域づくりの実質な取り組みは、観光地域づくり法人「株式会社かまいしDMC」が担っているが、この日本版DMO法人（地域DMO）に依存すること大である。

2021年度から2022年度にかけて観光による消費額及び経済効果は約2億円増加しているとのことで、まずまずの経済波及効果は出ているようだ。

ただ、観光振興ビジョンでの取り組み表明やフォーラムの開催等を通じて、地域との相互理解を図る努力はされているようだが、市民をはじめ観光客の認知度は不十分のようだ。まずは、市民一人ひとりがこの構想を認識し地域のあるべき姿に誇りを持つ仕掛け作りが大切ではないだろうか。

一口に「持続可能な観光地の推進」と言っても実現は生易し物ではないのが、資源に恵まれない地域の課題である。まずは、地域住民と観光客とが相互に潤う形でのアクションを起こすことから始めるべきではないかと考える。

また、物産・飲食の充実、地域製品のブランド化も大切な要素に変わりはない。これらのことは、佐賀市も当てはまることで、釜石市に見習うべきものはたくさんあることを実感した視察であった。

会派行政視察所見

令和6年10月1日(火) 10時～

岩手県遠野市 こどもの本の森 遠野

研修題目：こどもの本の森 遠野について

江頭弘美

こどもの本の森は、世界的建築家・安藤忠雄氏が「東北の復興のシンボルは子どもたちの未来である 子どもたちの未来のためには本・読書が大事ではないか」と提唱し、その想いを「こどもの本の森 遠野」として、同志に声をかけ育英資金を募り遠野市に寄贈した施設である。

蔵書13,000冊ほどであるが、ここは一般的な図書館ではなく、本とふるさと未来へつなぐ文化復興拠点である。その証拠に本の貸し出しは行っていない。一貫して子どもたちの想像力と創造力を育む居場所としての想いを大事にした運営を行なっている。30年、50年後を思い描きながら将来を見据えて子どもたちの夢と希望に向かっていくしくみづくりを目指す確固たる推進事業の概念は伝わってくるが、このような施設を長期安定的に運営していくことの難しさも垣間見えた。

選書や企画の方法として、開館前に2年度にわたって著名なブックディレクター幅允孝氏に委託されているが、「百聞は一見にしかず」、テーマごとに分類された様子は、人を心地よく誘導するには十分なものがあつた。ただし、数千万に及ぶ委託料は今後の課題として残るだろう。

本を読むという営みは決して即効性のあるものではない。開館3年ほどで教育的効果は判断できないのは当然であるが、この施設で日々体験した子どもたちの成長の可能性を思う時、市民の夢は大きく膨らんでいるのではないかと想像できる施設であつたことは確かである。

遠野市視察

参加者： 江頭弘美、川副龍之介、西岡義広、松永幹也、千綿正明、江原新子、川崎健二、稲葉たかひろ、宮崎健、

視察項目： こども本の森東野運営状況について

令和3年にオープン

13の分類で展示。貸し出しはしない

寄付の方法

高いところの本の取り方

インスタのフォロワーは

蔵書は18000冊と多くはないが、表紙を天井まで見えるように置いてあり、こどもたちが本を読みたいと思うような設計がなされている。

所感

1. こどもたちの読書をするのが少なくなっている今、佐賀市でも図書館の改築が予定されているので、こどもたちが本を読もうという仕掛けとしては、東野のこどもの本東野のデザインは参考になると思う。
2. こどもの本東野は貸し出しを行っていないが、佐賀市では貸し出しても良いと考える、まずは読みたいと思うような仕掛けづくりが必要だと感じた。
3. こどもたちが走り回っても注意をしない方針だと伺った、のびのびとこどもに触れる環境はやはり佐賀市の図書館にも必要だと感じた。

釜石市

参加者: 江頭弘美、川副龍之介、西岡義広、松永幹也、千綿正明、江原新子、川崎健二、稲葉たかひろ、宮崎健、

視察項目:釜石市の観光について

町全体をミュージアムとして観光客を受け入れられている、小中高校の生徒たちに観光のための教育をされているとのこと、こどもの頃から嵯峨野観光を知るといふ点では面白い取り組みである。

所感

1. まちづくり会社である TMO により、観光の分析をされており、釜石市からの業務委託を財源とされているようだ、観光協会とも情報の共有化がなされており棲み分けを考慮して運営をされている、佐賀市の TMO と観光協会ももう少し連携を強化すべきだと感じた。
2. 小中高校への観光教育はかなり面白いと感じた、こどもの頃から佐賀市の観光を知ることにより、郷土愛を育む事も出来るように感じたし、観光にも興味を持つ生徒が多くなることは良いことであり、佐賀市にも取り入れる事も必要だと思った。
3. 目立った成果にはまだ繋がっていないようではあるが、取り組み自体は面白いと感じた。
4. TMO の社長に民間人の専門家を入れることで分析の手法や、観光協会との連携などが図られ、連携して取り組むことで効果が出てくるかもしれないと感じた。

【遠野市】

「こども本の森 遠野」

「本とふるさと 未来へつなぐ 文化復興拠点」

遠野市は三陸文化復興プロジェクトで、献本活動と文化財レスキューを行ってきた。次の被災地支援として、沿岸と内陸をつなぐ遠野が“本”を中心につぎの時代をつくる子どもたちの想像力・創造力を養うことが大切と考え、被災地の文化復興拠点として子ども向け本の施設を整備する

「こども本の森構想推進事業」が進められた。

脈々と伝承されてきた遠野の古きよき文化を土台として、未来をつくる子どもたちのために“本”とふるさとが未来へつなぐ、遠野にしかできない新たな復興のシンボルを目指していた。

世界的建築家・安藤忠雄氏が提唱する「東北の復興のシンボルは子どもたちの未来である」「子どもたちの未来のためには本・読書が大事ではないか」という想いをカタチにするため、安藤氏が「こども向けの本の施設」をつくり、遠野市に寄贈された。

令和3年7月25日に「こども本の森 遠野」としてオープンした施設は、遠野市が運営を行っている。

<建築デザイン・空間構成>

吹き抜けの閲覧室と中央にそびえる螺旋階段が特徴的で、湾曲する本棚と階段が構造的にも美しく融合し、6段目より上の本は「見せるため」に表紙のみで配置し、同じ本を下段に置く工夫で、子どもでも取りやすい書架である。

<子どもに優しい工夫>

靴を脱いで畳の空間でくつろげるスタイルを用い寝ころんでも安心な環境を構築した。約13,000冊の絵本・児童文学・図鑑・写真集・アート本・海外本などを、13の独自テーマで分類してまるで本の迷路を巡るような体験ができる。本棚に小窓や隠れ家のような椅子スペース、縁側など、子どもの想像力を掻き立てる遊びの要素が多数仕込まれている。

<運営・利用案内>

入館無料、閲覧のみ可能で貸出はなし。

開館：9:30～17:30、休館：毎週水曜・年末年始・蔵書整理期間

混雑時は子ども優先。団体（15名以上）は事前予約が必要

<所感>

空間は「本の森の中にいるような静けさ」があり、古材と新構造が融合し、

“居場所”としての居心地が高評価されている。又、学習施設として理想とされ、自治体の教育・まちづくりの先進事例として視察が絶えない。

図書館としての評価は賛否両論あるが、既成概念にとらわれることなく

子どもたちが本に親しみ、創造力や好奇心を育むことを目的とした施設としては大きな意義を持っていると捉えた。

子ども達が本と出会う場所としてのコンセプトは素晴らしく、今後の図書館の運営に一石投じた感がある。

独自テーマで分類しているため司書に取っては馴染めず抵抗すらあると聞く。

しかし、従来の図書館としての目的とは全く違うコンセプトであるため相容れないことは仕方ないと思うが次世代に送る図書館として大きな位置を築くのではないかと考える。

佐賀市においても市立図書館の全面リニューアルが企画されているが、

子ども本の森のコンセプトは参考にすべき事案であると考えます。

“子ども達の本との出会いを大切に”

【釜石市】

「釜石オープン・フィールド・ミュージアム」

釜石市の釜石オープン・フィールド・ミュージアムは、釜石のまち全体を「屋根のない博物館」と見立てる観光コンセプトである。

このコンセプトの下で「博物館に展示する宝」として、主に地域の日常生活や仕事を紹介する体験型のプログラムが開発された。

プログラムを通じて釜石を訪問された方々は、地元の農家、漁師、林業を営む方々や地元企業の経営者、市の職員らと出会い、彼らの日常生活や仕事、震災からの復興の過程の話などを聞くことが可能である。

観光客は、地元の人たちの暮らしに興味を持ち、釜石の人や土地の魅力に気づくことができる。地域の方々は、自分たちが魅力的な技術や貴重な経験を持っていることを再認識される。

最終的には、地域の方々の住まう誇りや郷土愛の醸成、そして釜石の歴史や伝統文化の次世代への継承を促進することも、大切な役割となっている。

更に新たな観光への成果が現れている。2020年に市民1400名を対象に実施したアンケート調査では、釜石市在住のおよそ60%の方が「震災からの復興に観光が不可欠な役割を果たしたと思う」と回答されている。

また、70%以上の方が「観光に対して協力したい」という姿勢を示しており、これらは比較的高い割合と考えられる。

<所感>

「釜石オープン・フィールド・ミュージアム構想」は、観光をきっかけに地域資源の価値を再発見し、住民自らがその魅力を伝える仕組みとして、地域の活性化と誇りの醸成に大きく貢献している。

観光の量から質への転換を図り訪問者数よりも、滞在の満足度・地域とのつながりを重視した点は特筆すべき事例であり、住民主体の取組で観光客は「受け入れる対象」ではなく「地域の一員」として迎える姿勢は「持続可能な観光地100選」に選出される理由であろう。

更に、防災・復興の教訓を伝えることは単なる観光地では得られない“学びの場”としての価値が高いことは言うまでもない。

佐賀市においても、単なる観光誘致ではなく、地域資源を“伝える・学ぶ・体験する”観光の導入により、持続可能で交流を生み出すまちづくりを目指していく必要がある。

会派視察報告書

田民子加

代表 江頭弘美様

報告者 西岡義広

日時 R7 1/20(月) ~ 1/22(水)

視察先 1/21(火) 沖縄県 与那国町 9:30 ~

1/22(水) " 石垣市 9:30 ~

◎ 与那国町 自衛隊 a-l-7-基地について
(所感)

一番危険な水域 ^{北側} 尖閣諸島の近い与那国町に
隊員は 200名 家族入れて 約 300名

自衛隊員 入れて 約 2000名 弱 小笠原島に在る
隊員も 三集落にわけて住んでいると事

今年に 焼却施設 完成 也 1/23 7月完成

(旧 8ヶ所 5ヶ処理) 総事業費 23億 8400万円

9割 補助 である 施設管理を している 物である

現在 中学校 2校 小学校 3校 給食 無料化

3年以内 統廃合 予定。

自衛隊 医務官 (医師) 町民皆様に 去る迄に

成、7 いると事。 大きい 病氣。手術は 石垣市へ

人口が 少ない かも しれない かも 町民皆様に 方が

役場 職員も 大変 喜ばれ たい かも 印象的 である、

村町長 とも 面会 して いろいろ あり ました 時 には 佐賀県 受入れ

知事 によろしく と 事 である。

◎ 石垣市 ライドシェアについて

〈所感〉

市内に77社-会社は 12社あり、この事業に取り
組んでいるのは 7社であり、基本的に各社1台
ずつ許可を受けている。

就労支援として 二種免許 補助として

1人 10万円、事業者には 2万円の補助制度

※ ライドシェアによる収益を既存のドライバーへ
賃金や 福利厚生に還元。

たとえば 弁当等の食事や ドリツクの支給、旧車たり
賃金とは別に 500円支給 などで 事業者ごとの
創意工夫を応援し働きやすい 職場づくりを
つなげる ことであった。

石垣版ライドシェアモデル構築事業補助金を創設

以 ちの中でも 人件費については 時給1000円

1人 100万円を上限として制度あり。

是種 佐賀市でも 成功させる為には 人材、

そして 企業を 育成して行かなくては ならないと
思う次第である。

資料関係は 本市 都市戦略部に説明に
渡して おきたいと思う。

以上 報告としたい。

与那国町視察

参加人員 千綿議員、西岡議員

視察項目 自衛隊誘致による地域振興策について

以前に来たときに焼却炉が無いので、国の補助で設置したいとのことだった。
24億円焼却炉、本体工事9割、設計などが8割の国の補助が出た。
令和3年7月完成

給食の無料化平成26年より無償化を開始、自衛隊への町有地1500万円の賃料
の中の1000万円で無償化を実施、現在200名の生徒の給食を無償化している。
小学校3校中学校2校
先生は有料

隊員は200名(家族入れて300名)
4年前から指定管理をしていた病院がコロナ
で週2回自衛隊から来ていただいて見てもらっている。
また看護師も不足しているが隊員の奥さんが看護師免許をもっている方に来て
いただいている。
令和4年から

グラウンド体育館などは原則解放するようになっている。
周辺整備が進んできた、
庁内の改修する予定(シェルター機能を付けながら庁舎の改修をする)で国から
の交付金が増える。

所管

1. 自衛隊が来て地域振興の予算が増えたとのこと、自治体の所得税が1.7倍ほどに増えたとのこと、自衛隊の隊員の給料が地域の皆さんより高いため、かなりの増収になっているとのこと、やはり、自衛隊員の皆さんが増えることで地方の税収は増えると感じた。
2. 庁舎に着いても老朽化が進んでいて、建て替えの話が出てはいたけどなかなか進まなかったが、シェルターを作ることで国の補助が増えるとのこと、その補助を使い建て替え計画が進んでいる。

3. 佐賀でも 800 世帯の隊員が来る予定なので、住民税等の地方税の収入は増えると考えます。

また、地域に若い隊員が増えて地域が活性化しているとのこと、地域の水路浚渫にも大変役立って居るとのことで、メリットは多いと感じました。

石垣市視察

視察議員 千綿議員、西岡議員

視察項目 ライドシェアの取り組み

一時期コロナ禍でタクシードライバーが大量に離職していたが、かなりのドライバーが戻ってきている。

石垣市は観光地なので、コロナ禍以前まで回復している、現在ライドシェアの人員は1名のみとなっている。

既存のドライバーへの支援をしている。

2種免許の取得の補助を出している。500万円

現在石垣市では、2種免許取得者に対して個人に10万円と会社に2万円、就労支援金として拠出している。

現在305名タクシードライバーがいる。

石垣市のタクシーはほとんどすべてが、電子マネーとクレジット決済が可能であり、配車アプリの普及が進んでいる。

GOアプリよりDiDiのアプリが普及している。

所管

1. 決済手段がQRコード決済を始め、クレジットカード決済を進めることで利用者が増えることを目指した方が良いと考える、佐賀市や国の補助制度を利用し決済手段への補助をやるべきと考える。
2. ライドシェアは他国では縮小傾向にあると言われているので、2種免許の取得補助を創設した方が早いと考える。佐賀市でも早急に補助制度の創設を望む。
3. タクシーの乗客を増やす事を考えないと、乗客は戻らないと考える、よって今後はライドシェアより、決済手段の多様化を進めるべきと考える。

佐賀市議会 自民さが
会派長 江頭 弘美 様

江原 新子

視 察 報 告 書

○視察先:京都府田辺市役所

○視察日:令和7年2月4日(火)

○視察テーマ:広報・広聴プロモーション活動について

1. 視察の目的

本視察は、田辺市が実施している先進的な広報・広聴活動の取組について学び、佐賀市における市民との効果的なコミュニケーション、情報発信の在り方、そして市民参加型の行政運営の参考とすることを目的とした。

2. 概要と主な内容

田辺市では、以下のような取り組みを通じて市民との双方向コミュニケーションを強化していた:

(1) 広報戦略の再構築

- 市の魅力や施策を効果的に伝えるため、「誰に・何を・どう伝えるか」を明確にした広報戦略を策定。
- 「市民目線」「若年層への訴求」「継続的な情報提供」をキーワードに、発信内容の工夫がなされていた。

(2) SNS・デジタルメディアの活用

- Facebook、Instagram、YouTube など複数の SNS を活用し、多様な層へのリーチを図る。
- 動画を用いたコンテンツ制作や、ライブ配信によるイベント告知なども実施。
- 特に若者世代へのアプローチに成功している事例が報告された。

(3) 市民参加型の広聴活動

- 定期的な「市民懇談会」や「意見交換会」を開催し、市民の声を行政運営に反映。
- 若者や子育て世代の意見を集める場として、カフェ形式やテーマ別座談会なども工夫されている。

(4) プロモーションと地域資源の活用

- 市の観光資源や歴史的文化を活かしたプロモーション動画・パンフレットの制作。
- 地元高校生や大学と連携したプロジェクトも実施しており、地域人材の育成にも寄与している。

3. 所感

田辺市の取り組みは、「市民に伝わる」だけでなく「市民とつながる」広報・広聴を実現しており、非常に先進的であった。特に以下の点が佐賀市においても導入可能・有益と考えられる：

- ターゲットを意識した情報発信の明確化：伝えたい相手に届く言葉・媒体の選定は、佐賀市においても重要。
- SNSと動画の積極的活用：若年層の関心をひく仕組みとして、継続的なコンテンツ発信が必要。
- 市民参加型の意見収集手法：単なるアンケートではなく、対話形式による意見聴取の場の整備が望まれる。
- 地域資源のブランディング：市の魅力を再発見し、市民とともに育てていく視点を持ったプロモーションの強化。

4. まとめ

本視察により、広報・広聴は単なる「情報の一方的伝達」ではなく、市民との信頼関係を築く重要な行政機能であることを再認識した。田辺市のような柔軟かつ戦略的な取り組みは、佐賀市の今後の広報・広聴活動にとって貴重な示唆を与えるものであり、今後の市政運営に活かしていきたい。

○視察先:和歌山県新宮市

○視察日:令和7年2月5日(水)

○視察テーマ:新宮市における「徐福とまちづくりについて」の視察報告

地域資源である「徐福伝説」を活用した観光振興と地域活性化施策の実態を学び、佐賀市におけるまちづくり施策への示唆を得ること。

1. 新宮市における「徐福伝説」とは

新宮市には、秦の始皇帝の命を受けて不老不死の霊薬を求めて東方に渡ったとされる「徐福」にまつわる伝承が数多く残されており、これを地域資源として活用したまちづくりが行われている。徐福の墓や徐福公園、資料館などが整備されており、地域住民や観光客に歴史文化を伝える役割を果たしている。

2. 視察内容の概要

- 徐福公園の見学

徐福の墓所とされる場所を中心に整備された公園。園内には中国風の建築様式を取り入れた施設が点在し、観光資源としての整備がなされている。

- 徐福資料館の視察

映像やパネル展示を通して、徐福の歴史的背景や伝承を分かりやすく紹介。多言語対応のガイドツールも整備され、インバウンド需要にも対応。

- 地域との連携事例の紹介

地元の商工団体や観光協会と連携し、徐福をテーマとしたイベント(例:徐福まつり)や特産品開発(例:徐福茶、徐福まんじゅう)などが展開されている。

3. 得られた知見と考察

- 歴史的・伝承的要素を地域アイデンティティとし、それを核とした観光・地域づくりが機能している点が印象的であった。
- インフラ整備や観光資源としての磨き上げだけでなく、住民参加型のイベントや商品開発により、地域に経済的波及効果を生み出している。
- 多言語対応やデジタルコンテンツの活用により、外国人観光客の受け入れ態勢も整っていた。

4. 所 感

- 佐賀市においても、吉野ヶ里遺跡や徐福伝承(徐福渡来の地とする説も存在)など、地域独自の歴史文化資源を活用した観光振興が可能である。
- 特に徐福に関しては、佐賀県や隣接地域と広域連携を図り、「徐福東渡伝説」ルートの形成や共通ブランド化なども検討に値する。
- また、若者や事業者の参画を促す仕組み(クラウドファンディング、コラボ商品開発など)を通じて、地域住民が主体となるまちづくりの推進が望まれる。

5. 今後の課題と提案

- 歴史資源の正確な把握と学術的裏付けを伴った活用の重要性
- 伝説や神話を現代的に再構築し、ストーリーテリングによって魅力的に発信する工夫
- 広域的な観光ルートの形成に向けた自治体間の連携強化

以上の視察を通じて、佐賀市の今後の文化・観光政策への新たな視点を得ることができた。今後の政策提言や議会活動に反映してまいりたい。

視察報告書

令和7年2月4日

令和7年2月5日

自民さが

宮崎 健

1. 京田辺市「未来都市プロモーション動画について」

自治体にとって総合計画は骨格そのものであり、ひいてはその内容をどうやって市民に理解してもらうのか、これはどの自治体も頭を悩ませているところだ。

今回京田辺市はそれを動画で、しかも市民に分かりやすいように作成をされ、それが京都府の知事賞に選定された。

このプロモーションムービーには3つの鍵があると思う。

一つ目は作り手の連携である。通常なら業者に任せきりのところを当時の担当者は熱心に業者と連携しながら実際に撮影現場にも携わっている。

二つ目は言うまでもなく題材である。パルクールを前面に出し京田辺市らしさをスケボーやロードレースなどを用い若者に訴求する内容に仕上がっている。

そして三つ目は市民の携わり方である。エキストラを集ったり大学生高校生に意見やアドバイスを求め、より市民が愛着を持てる動画となった。

2度目の製作は残念ながら予算がつかなかったとのことだったが本市もプロモーション動画には他自治体に負けないくらいのコストとクオリティを持っている。また現在第3次総合計画が4月に始まったばかりであり今回は2040年までの長期となる総合計画である。動画でアピールするのも一考ではないかと思った。

2. 新宮市「徐福によるまちづくりについて」

本市にも徐福伝説は残っており、上陸地と言われる諸富一帯や金立一帯ではそれをもとに観光のパッケージ化を行った。しかし、近年本市においてなかなか徐福での観光ツーリズムを聞くことが無くなってきており、新宮市ではこういった観光パッケージを展開しているのかを希求しに行った。

まずは徐福公園だ。これは決して広大ではないが非常に作りが細かく売店等も完備しており、市民のみならず来街者が訪れても飽きの来ないものだった。これは一般財団法人新宮徐福協会が委託管理をしている。

他にも土産物として市の木でもあり徐福が求めた不老不死の薬ともいわれる天台烏薬があったりと市を挙げて新宮も徐福による町おこしを行っている。また、徐福を忍び8月には花火大会も行われている。

それでも担当者は昔に比べると徐福での町おこしは少し後退したと言われていたのが印象的だった。

新宮の徐福での町おこしは市の観光課はもちろんだが先ほど述べた一般財団法人新宮徐福協会の力が大きい。本市にも同様の団体は存在しているため是非、市と共同での徐福の町おこしを期待したいと感じた。

自民さが視察研修報告

自民さが 川崎健二

1 日時・場所

令和7年2月4日 9:30～11:30 京都府京田辺市
5日 9:30～11:30 和歌山県新宮市

2 所感

(1) 京田辺市（未来都市プロモーション動画）

視察に先立ち、人口構成を調べてみた。

直近の国勢調査では10年で9%の増加であるが、子育て世代やそれに伴う年少人口が少ない。若者世代の呼び込みや一旦市外へ転出した人口を呼び戻すことが課題と感じた。

① 部路モーション動画では初めに高級玉露の産地として飯岡の茶畑が紹介されている。今回の訪問でも説明の際にいただいたお茶が玉露で、地場産業である玉露の日本一にかける思いを感じた。

② ビデオで主人公のかんなが22歳となり社会人として歩みだす場面で酬恩庵一休寺が紹介されている。今回は前日に一休寺を見ておいたが、実際に見てから説明を聞くのは有効であり大切だと感じた。

③ 大学を卒業後にかなりの転出があるので、ビデオの中でも若者の回帰や子育て世代の転入に力を入れているとのことであった。

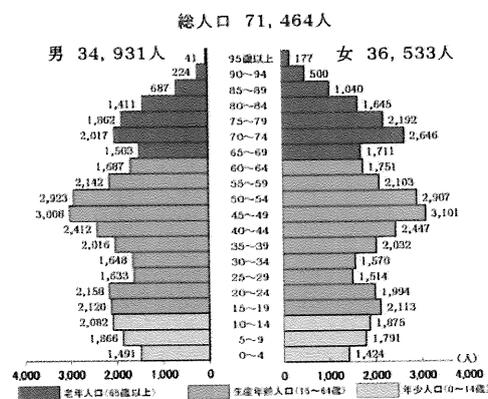
④ ビデオは若者に訴求力のある秀作と感じた。制作担当職員が第2版の起案をしたが却下されたとのこと。知事賞も受賞しこれだけの広告効果がありながら認めなかった上司の考えをもっと知りたかった。

⑤ Youtube では2021年2月で17,490回の再生と少ない。7年前に製作された Surf Slow SAGA が2248万回再生である。もっと積極活用して外向きの効果を上げるべきだと感じた。

(2) 新宮市（徐福伝説）

視察前に新宮市の人口の推移を調査した。グラフが示すように佐賀市と比較し新宮市は減少の一途をたどっている。若者・労働人口の流出防止が喫緊の課題と感じた。

5歳階級別人口ピラミッド(令和5年4月1日現在)



新宮市（に相当する地域）の人口の推移

1970年(昭和45年)	42,073人
1975年(昭和50年)	41,748人
1980年(昭和55年)	42,428人
1985年(昭和60年)	40,465人
1990年(平成2年)	38,140人
1995年(平成7年)	36,278人
2000年(平成12年)	35,176人
2005年(平成17年)	33,790人
2010年(平成22年)	31,498人
2015年(平成27年)	29,331人
2020年(令和2年)	27,171人

佐賀市（に相当する地域）の人口の推移

1970年(昭和45年)	215,000人
1975年(昭和50年)	222,687人
1980年(昭和55年)	236,029人
1985年(昭和60年)	242,072人
1990年(平成2年)	243,726人
1995年(平成7年)	246,674人
2000年(平成12年)	243,076人
2005年(平成17年)	241,361人
2010年(平成22年)	237,506人
2015年(平成27年)	236,372人
2020年(令和2年)	233,301人

- ① 徐福公園は新宮駅からすぐのところであり、売店なども備えていた。市外から他の目的（例えば熊野速玉大社など世界遺産の観光目的）で来た人達が「ちょっと立ち寄ってみよう」と思える場所であった。
- ② 碑文や説明書きがきちんと整備されていた。観光地化には必須と感じた。
- ③ 徐福供養式典や徐福花火大会など、年間を通じて徐福にちなんだ行事を開催しており、徐福に関する知識と共に保存・伝承しようとする市民意識の醸成につながっていた。
- ④ 日本徐福買いが組織されていて新宮市は副会長、佐賀市は会長であることを初めて知った。こういった組織を活用しない手はない。佐賀市でも徐福文化の発展を目指し、積極的に相互連携・協力を図るべきだと思った。

会派行政視察

日 時：令和7年2月4日

場 所：京都府京田辺市

視察内容：シティプロモーションについて

京田辺市では総合計画を市民に対し視覚的に伝えるためにシティプロモーション動画の作成にあたった。また、プロモーション動画には市外へのPRに加えて、市民のシビックプライド醸成のねらいもあるようだ。他市でもプロモーション動画を作成している例は数多あるが、京田辺市では市の未来像を表現しているのが最大の特徴である。また、契約先の事業者任せにせず、ワークショップの開催や、市民エキストラの起用など、市民と共同して作成しているのも特筆する点であろう。ワークショップでは市内に立地している同志社・同志社女子大学と田辺高校の学生に若者視点のアイデアを求めており、本動画が「未来目線」によって作成されていることが推察された。

京田辺市は自転車ロードレースの世界大会やハンドボールの小学生全国大会が開催されるなど、スポーツに縁が深いまちということもあり、動画ではパルクールが取り入れられている。また、スケートボードパークや民間のプロスノーボード訓練施設が立地しており、そういったカルチャー面からもパルクールが合致したのかもしれない。

動画の中では市がPRしたいところをロケ地に選定し、ストーリーに沿って構成され、京田辺市で住み暮らすイメージを具体化している。私自身も本動画を拝見したが、京田辺市での生活をイメージすることができた。

動画の効果検証という部分においては評価が困難であるが、1万再生を超えており、きっかけづくりには寄与しているのではないだろうか。また、京都府の広報賞において知事賞を受賞しており、外部からの評価を得ているのは評価できる点である。

本動画は大阪・関西万博でのPRも予定しており、英語や中国語でのテロップにも対応している上、パルクールという視覚的にわかりやすい構成のため、海外の視聴者にも分かりやすく印象に残るのではないだろうか。

京田辺市の取り組みから「未来目線」での広報のあり方を学ことができた。本市においても2045年を始点にバックキャストिंगの手法を用い総合計画の策定を行っている観点からも、今後は「未来目線」での広報のあり方を模索していきたい。

日 時：令和7年2月5日

場 所：和歌山県新宮市

視察内容：徐福とまちづくりについて

新宮市では一般財団法人新宮徐福協会が徐福公園の指定管理や、徐福に関する事業に取り組んでいる。新宮市の企画政策課がその事務局を務めている。

新宮市には蓬莱山をはじめ、徐福の墓や上陸地など徐福伝説にまつわるものが点在している。そうした背景をもとに徐福公園を市が整備している。

新宮市には上記の史跡だけでなく、数々の伝承や記述（文書）が残っており、それらの歴史を後世に伝えるべく徐福供養式典や花火大会が執り行われており、市民にも「徐福さん」と親しみを持って呼ばれているようである。

徐福が求めた不老不死の薬として天台烏薬が新宮市では有名であり、その天台烏薬を用いたお茶や石鹼など関連商品が開発されており、観光消費の誘発に務めている。本市においては徐福に関連する商品開発などは新宮市に比べるとそこまで活発ではないため、新宮市の取り組みは非常に参考になった。

また、新宮市では佐賀市と同様に連雲港市と交流があるだけでなく、山東省龍口市や江蘇省蘇州市といった徐福に関係のある中国の都市や韓国、台湾、香港といった多くの国や都市と交流を持っており、徐福が友好の象徴となっているようである。

いずれにしても新宮市は佐賀市と比較すると徐福に対する熱量や思い入れのようなものを肌で感じる事ができた。本市においてもその姿勢を見習わなければならないだろう。

2 / 3 ~ 5 会派視察報告

自民さが
川副龍之介

2 / 4 京田辺市「未来都市プロモーション動画事業」

令和2年度地方創生推進交付金等により予算500万円で製作された。製作の目的は、第4次総合計画を市民に視覚的に分かりやすく伝え、未来像を見せる事である。

若者のアイデアを取り入れ、若者への訴求力・インパクトを打ち出している。今回、パルクールを取り入れたのは、京田辺市がスポーツの盛んなイメージがあるためである。また、パルクールを通じてストーリーを構成し、京田辺市の住みやすさ、定住・移住の促進を全面に打ち出している。

プロモーション動画の公開は市公式のYouTube、SNS、HPや京都・大阪・奈良主要駅のデジタルサイネージで上映している。若者は惹かれたが、世代の上の方は理解し難い意見もあった。結果として、このプロモーション動画は令和3年度京都広報賞で知事賞に輝いている。

京田辺市は広報誌に力を入れられて、数々のコンクールで入賞されている。色々なアイデアを出して京田辺市の魅力を掲載している。

市民や市外の方に佐賀市を知っていただくために、広報は大変重要な役割があります。地方にとっては、将来像をPRするさまざまな手段の引き出しを多く持たねばならない。

2 / 5 新宮市商工観光課「新宮の徐福について」

2200年以上の前から、熊野に進んだ文化や技術を伝えてくれた徐福に対して新宮市民は親しみを込め「徐福さん」と呼んでいます。(佐賀市でもそう呼んでいる)

新宮市には、徐福ゆかりの地が多くあり徐福公園、阿須賀神社、蓬莱山、徐福の墓、七塚の碑、徐福の宮、徐福上陸の地が代表的なものです。また、徐福に関する伝承及び記述が数々残っています。

徐福の渡来の目的である不老不死を求めた霊薬は「天台烏薬」という薬木である。

徐福を偲び敬う事として、徐福供養式典や花火大会を催している。また、新宮市内の全ての小中学校において徐福の学びを行っていて、学生・生徒は徐福の功績等を理解し、歴史の大切さを身に着けている。

新宮市では徐福を通じた交流を行っており、研究団体や研究者によって日本徐福協会が組織化されている。構成として佐賀県徐福会、新宮徐福会、八女徐福会、富士山徐福学会、神奈川徐福研究会、筑紫徐福会等が加入し佐賀県徐福会が会長を務めている。会の活動内容は情報交換や共有をしながら徐福文化の発展を目指し総合連携・協力を行っている(ここ数年、日本徐福会の活動が滞っている。会長が原因なのか?)

また、中国の徐福ゆかりの地「連雲港市」と新宮市では交流が始まり、新宮市出身者が連雲港市で店を出している。その他に、山東省や浙江省などもあり韓国や台湾とも国境を超えた交流を行っている。

新宮市が佐賀市よりも徐福に対する思いが強いと感じた。しかし新宮市民全体が徐福をわかっているかと問えば、そうではない。一部の思いが強いと感じた。佐賀市は施設面では劣っていると思うが、市民の意思を高めて行くべきと考える。それにはまず、子供たちからだと思う。

自民さが会派行政視察所見

日時：令和7年2月4日（火）午前9：30～

視察地：京都府京田辺市

研修項目：広報・広聴プロモーション活動について

江頭弘美

プロモーション動画を地域の自然や歴史的建造物及び特産等を題材にして作成する自治体は多いが、京田辺市のように総合計画を市民に視覚的に分かりやすく伝える手法は珍しい。

特に若者をターゲットに「見てもらいたい！」という訴求力を追求し、若者にインパクトを与える取り組みは、行政としては柔軟性を持った感覚であると思われる。

業者からの提案であっても、「パルクール」を題材としたプロモーション動画の作成にはいろいろな意見が噴出したようだが、スポーツが盛んなまちのイメージは十分に伝わってくるものがある。まちに無料で楽しめる公設のスケートパークや民間のプロスノーボード訓練施設があることからパルクールを取り入れた試みが頷ける。

ストーリー構成も主人公の学生時代、社会人時代、婚約シーン、子育て時代と成長する過程が描かれ、まちの成長とリンクする感触を市民に与えているのではないかと思われる。

京田辺市には同志社大学・同志社女子大学が存在することによって、学生とのワークショップを積極的に行うことができる利点も大きいと言える。

市民から想定通りの賛否両論があることは覚悟の上で、「万人受けするありきたりのつまらない自治体動画ではなく、若者の目を引きたい、世間から注目を集めたい」という尖った思いは、十分に伝わるものがあつた。

令和3年度京都広報賞（映像の部）で知事賞受賞を得ても、続編に予算が計上されなかった経緯は、自治体の事情を鑑みても、プロモーション動画の効果検証という面で費用対効果等を筆頭に、どこの自治体も抱える同じ課題があることを実感するものであつた。

自民さが会派行政視察所見

日時：令和7年2月5日（水）午前9：30分～

視察地：和歌山県新宮市

研修項目：徐福とまちづくりについて

江頭弘美

市役所での研修前に徐福公園と徐福上陸地の現地視察を会派の議員と試みた。

佐賀市との違いがハードの面でも感じられる。新宮の徐福公園は門構えからもわかるように、中の顕彰碑、由緒版、徐福の墓、七塚の碑、絶海と太祖の碑等公園整備に関しては充実している。しかし、徐福にまつわる文献等は皆無で、佐賀市の長寿館の展示とは比較すべき比ではない。徐福公園内にミニショップも併設されているが、この点に関しては新宮市側が徐福関連のグッズは、はるかに充実している。このように一長一短あることを実感するものである。

徐福とまちづくりについては、佐賀市がほぼ徐福会に指定管理者として運営を任せている状況と違って、新宮市は徐福協会のメンバー構成に事務局として市の職員も入り、市職のOBも加わっている関係上、市民の徐福に対する関心度は高いのではないかと推測される。佐賀市もしかりだが、新宮市も以前ほど徐福に関連してまちづくりを行う気運は乏しいように感じられる。15年ほど前、佐賀県が主体となって行った「徐福プロジェクト」のような行政が一丸となった施策を打ち出さない限り市民の意識向上には繋がらないのではないかと思う。

新宮市の徐福伝説の地の利として、徐福が不老不死の霊薬を求めたと言われる蓬莱山も徐福公園並びに上陸地の側にあり。世界遺産である神仏が鎮まる霊場の熊野三山を有する場所としては、観光の面からも新宮市の有利性は見て取れる。

私の視点としては、約2,200年前に徐福の一団が東方海上に渡米する地としては、有明海北上のルート以外考えられないと確信しているが、徐福長寿館30周年を機に佐賀を彩る浪漫の幕開けとして、もっと徐福を活用してもいいのではないかと強く思う次第である。

「一見は百聞にしかず」をまさに実感した視察であったことを最後に記しておきたい。

【京都府京田辺市】

「広報、広聴プロモーション活動について」

京田辺市では、若者を中心とした新たな市民層や来訪者層に向けて、「未来志向の都市イメージ」を強く発信するため、従来の観光PRとは一線を画すプロモーション動画を制作する企画が生まれた。そのコンセプトの柱となったのが、「パルクール」という都市を舞台に身体を自由に動かすアーバンスポーツの導入である。

<パルクール採用の理由>

- ・動きのダイナミズムにより都市空間の魅力を臨場感ある形で伝える。
- ・若年層（特にZ世代・SNS世代）との親和性が高い。
- ・海外の都市プロモーションでの先行事例も参考にする。

<動画制作の概要>

- ・タイトル：「未来都市・京田辺 パルクールでめぐる」
- ・内容：プロのパルクールアスリートが、京田辺の都市空間（駅前、図書館、公園など）を自由に動きながら駆け巡る構成
- ・撮影手法：ドローン、アクションカメラによる臨場感ある映像
- ・公開媒体：YouTube、TikTok、Instagram

<事業費>

- ・総事業費：約500万円（動画制作費、広告出稿費）
- ・財源：市単独、一部広域連携予算（観光・まちづくり事業）

<成果>

- ・若者の関心を引き、「京田辺ってこんなに未来的なんだ」というコメントも多く寄せられた。
- ・大学のオープンキャンパス来訪者が「動画を見た」と話すケースもあり、移住や進学先としての認知にも貢献。
- ・メディア取材も入り、全国ネットで紹介。

<課題>

- ・市民の一部から「危険な行為を助長する」との懸念があった。
- ・公共空間でのパルクール撮影には安全管理と許認可調整が必要である。
- ・動画単体で終わらず、その後の継続的な施策（イベント等）につながりにくい点が課題となっている。

<所感>

佐賀市においては、20本以上のシティプロモーションムービーが作成され、中には高評価で観光映像大賞 2015 を受賞した作品もあり成果が出ているかと考えられる。

佐賀駅周辺やバルーンミュージアム等の都市空間を活用しバルーンフェスタ・温泉地・歴史資源と組み合わせた“動きのある”観光動画の作成も視野に入れるべきかと考える。

京田辺市のような映像表現による“未来都市ブランディング”は、都市の新たな魅力層（若者・クリエイター）を開拓する有効な手段である。佐賀市においても、「動的映像」や「身体表現」といった新しい手法を用いた体験型ブランディングを行うことで、都市の“文脈”をより鮮明に、魅力的に表現することが期待される。

【和歌山県新宮市】

徐福とまちづくりについて

新宮市においては西暦前3世紀、秦の始皇帝に仕えた方士・徐福が、不老不死の霊薬を求めて3000人の童男童女とともに東方へ航海し、新宮（熊野）に辿り着いたという伝承が古くから残っている。天台烏薬という薬木を発見し、この地を気に入り、永住し農耕・漁法・捕鯨・紙すきといった技術を伝えたと伝えられている。新宮市徐福公園は、熊野伝承と中国文化を融合させた独自の観光資源であり、アクセスの良さと歴史・体験要素を兼ね備えたスポットである。

無料で楽しめる史跡公園で、1994年の整備以来伝承と観光の拠点になっている。毎年8月に「徐福祭」や「徐福万燈祭」（花火大会）が開催され、地域の人々と観光客が共に慰霊と夏の風物詩を楽しみ、又台湾や中国・龍口との交流イベントも行われ、国際的な文化交流も視野に入れた取り組みが継続中である。

1. 観光資源としての活用
2. 地域文化の継承と創出
3. 経済と産業の振興
4. 国際・地域交流の窓口

<所感>

日本全国には「徐福伝説」が点在しており、佐賀市だけでなく、和歌山、静岡、長崎、熊本、山形、福井、京都、徳島、鹿児島など各地にゆかりの地が存在する。これは徐福が東方に向かう航海の中で、複数の地に上陸・定住したとする伝承が各地に広まったためである。

佐賀市の徐福長寿館は有料の体験学習施設で、薬草園やイベント等による体験型観光が特色であるが、30年を経て施設の整備、樹木等の管理が不十分で観光資源として再度整備が必要である。

30周年を迎えるにあたり、記念イベントの開催と共に古代の伝説を観光資源として融合させること並びにPRが急務であると捉えた。

日本徐福協会の会長は特定非営利活動法人 佐賀県徐福会からの選任で、連絡会が長く開かれていないとの事で誠に残念である。